

連載：研究者になる！—第80回—

教育学研究科・助教 三野 和恵

●先祖の母国、台湾への思い

高校進学後、好きだった数学の成績が振るわず、古生物学者になる夢を諦めました。一方で、以前から好きだった世界史や漢文・古文・現代文の授業を楽しみ、歴史研究部に所属し、記事を書き冊子を作るうちに、歴史をやってみようと思うようになりました。そこで大学は、歴史学が充実している憧れの京大文学部を、不合格覚悟で受験。第二志望は、私に読書好きになるきっかけをくれた伯母の母校で、リベラルアーツ教育を掲げている国際基督教大学（ICU）でした。京大に落ちたのは残念でしたが、ICUのキャンパスや雰囲気は気に入る、合格後迷わず進学を決めました。大学の授業はどれも面白く、深く印象に残りました。例えば歴史学の授業では、奇想天外な内容の史料との向き合い方を学びました。また、キリスト教に関するクラスでは、その後大学院で思想やその歴史を考察する中で大きな影響を受けました。卒業論文は歴史学で、台湾のキリスト教をテーマにしました。台湾人でキリスト者の母を持つという自分の背景はあったものの、自分にとって台湾は「あまりよく知らない故郷」で、時折祖父母や他の親戚を訪ねて短期滞在するのみで、当然台湾語も話せませんでした。植民地教育を受けた祖父母とは日本語で、マンダリン教育を受けたいとこ達とは身振り手振りで、後には片言の英語で意思疎通をし、台湾の人々の他人に対するフレンドリーさや、活発さに魅了されました。こうした言語的・文化的な隔たりを超えて台湾のことをもっと知り、その社会の中に入っていきたいという願望が研究テーマの選択、台湾語やマンダリンの学習の動機となりました。同時に、植民地時代に育った祖父母の経験をもっと知りたい、理解したいという考えもありました。その時代にそれぞれ医師と教師になった祖父母は、共に教育の機会に恵まれた幸運な人たちであり、日本人の親しい友人も多くいましたが、例えそうした中でも植民地支配を受けるということで、決定的に傷つけられていたのだということを深く考えさせられました。宗教・思想について考える際に、とりわけこれらが植民地支配下を生きる／あるいは差別的な状況の中で生きる人々にとって、どのような意味を持ち得たのかという問題に関心を持つようになったのは、こうした背景があったからだと思います。

●目標は、研究成果を国内外に発信していくこと

京大教育学研究科へ進学後は、日本植民地支配下の台湾で活動したスコットランド人宣教師キャンベル・N・ムーディに焦点を当て、彼が被植民者とされた台湾の人々と出会う中で、「西洋的近代」と癒着した当時のキリスト教像を問い直し、台湾人の反植民地主義ナショナリズムへの共感的姿勢を表明するに至った経緯を分析しました。同時に、ムーディら在台宣教師が設立に関与し

た、台湾基督長老教会の聖職者・信徒らの教会新聞・神学雑誌上の議論も分析しました。その中で、これらの人々が日本による植民地支配や海外宣教師による文化的優越意識を前にしつつ、独自の仕方でもキリスト教を自らのものとして内在化してきたこと、「台湾人」でありまた「キリスト者」である者に固有の集団意識と使命感を構想・表明することで、自決権・社会正義・反植民地主義ナショナリズムと呼応し得るような、神学の萌芽を育てていった過程を捉えることができました。なぜムーディに着目し、彼と台湾の人々との出会いと相互関係を見ているのかということ、台湾とは深い繋がりを持ちつつも、自分自身はその社会の一員であったことはなく、そうなりたいと願っているという立場にあることが関係しているように思います。これは物語を読むことが好きという部分とも繋がっていて、スコットランド、エディンバラでの研究滞在期にも深く思わされましたが、慣れない世界、異なる世界、知らない世界に入って、色々な人たちと出会い、知らなかったことを見聞きし、学ぶことに喜びを感じるからです。今後は、台湾の地域社会と教会、植民地支配との関係をより細やかに見てゆくこと、そのためにも台湾語の史資料の収集と分析をさらに進めたいと考えています。また、これまでの研究を英語で発信することに努め、日本語以外の言語を使用する研究者とも、より活発に意見交換をできるようになることを目標としています。

●一歩ずつ、着実に進む研究者への道

これまで「研究者を目指す」と意識したことはあまりなく、むしろ迷いながら今やるべきことをやっていく中で、ここまでやってきました。その迷いは修士時代まで非常に大きなものでした。考えを素早くまとめ発言するのが苦手で、このまま研究者養成コースを進んでいく資格が自分にあるのかと悩みました。ですが、修士論文を提出し博士後期課程への進学が決まった時に、非常に大きな解放感と励ましを与えられ、研究はたとえ自分のような遅めのペースの人でも着実に継続することで、自分なりの方法で進めていけると思えるようになりました。コツコツ研究作業をしていく中でいつの間にか道が開かれ、徐々に研究者ようになってきたという感覚です。「やるべきこと」とは、自分がやり始めた研究を、やり始めたからには良いものにしなければいけないということであり、研究を進めていく上で助けてくれた、多くの人たちへの応答としての意味もあります。これからも感謝の気持ちを忘れず大事にし、ずっと研究を続けていきたいと思っています。

